

学校名： 神奈川工業高校

担当： 社会科

氏名： 久保寺美佐

1. 今回の研修における目的やねらい

以前に、教師海外研修を体験した同僚が、私の担当する高校 2 年生の選択科目「時事問題研究」の授業で国際理解教育の単元の講師として授業実践を行った経験があった。教員が肌で感じてきた途上国の自然環境・生活様式・教育事情などを生徒に直接伝えていただき、大変印象に残る授業となった。

この経験から、自分自身が教師海外研修に参加してカンボジア王国の現在の状況を体験し、より具体的な指導を行うことで、生徒が国際理解に主体的に取り組む授業を実践したいと考えた。

また、事前事後の国内研修会では、最新の開発教育のワークショップを体験することで、単なる海外視察に終わらない研修の深さを期待した。

さらに、研修の対象が県内の小中高の校種の教員であることから、普段共同研究の機会が持てない他校種の教員の方々と意見交換しながら今後の連携を深めていくことも、今回の研修の大きな目的の一つである。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

研修参加が決定してから、高校 3 年生の「現代社会」の授業で貿易ゲームやフォトランゲージの手法を取り入れ、生徒の国際理解についての意識付けを促した。これには、予想以上の反応があり、「途上国の大変さがわかった」、「もう一度ゲームをやってみたい」など非常に積極的な学習姿勢がみられた。そのうえで、カンボジア研修の予定を説明すると、カンボジアの子ども達への質問や日本や自分の高校についての紹介など、多くのメッセージが出てきた。研修中に他の参加者と共同して、カンボジアの児童・学生へのインタビューが実施できたので、その結果をもとに、生徒にさらに具体的な国際社会の現状を伝え、問題点について自ら考える機会を与えることができると考える。

また、同行の教員とは教材の素材収集に留まらず、校種による教育実践の共通点や相違点について、深く情報交換することができた。小学校教員のパワーや中学校教員の包み込む穏やかさ、県立高校教員でも担当教科や地域による違いが大きいことなど、実際に膝を詰めて話さないと見えてこないことも多く、10 日間の共同生活はこれからの連携に向けて貴重な経験となった。

3. カンボジア国から学んだこと

カンボジアは、自然の資源に恵まれ、かつて穏やかな豊かな生活が送られていたこと。しかし、歴史の流れの中で、他国が経験していない悲惨な現実があったこと。現在はその過去に向き合いながら、カンボジアの未来に希望を託して積極的に活動している人が多くいることなど、現地を訪問して人々と話して初めて分かったことが多かった。そして、どの分野においても最も大切なことは教育だという話を聞き、改めて教育の重要性を強く感じ、自分自身の教育に対するあり方を再確認することができた。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

東日本大震災後、これからの国際社会における日本の立場は、今までとは違うスタンスで考えることが必要であり、貿易、経済、社会のあらゆる面で、知恵と工夫が必要となると思われる。そのような今という時代を生徒と共に考え、将来への道筋を探ることがこれからの国際理解教育に必要と考える。

現在担当する高校 3 年生の必修科目「現代社会」選択科目「日本史 A」の授業では、カンボジアの歴史と

日本との関わりなどを生徒が身近な問題として考えられるような工夫を行いたい。そのために、現地の紙幣や生活用具・伝統文化など具体的な資料を使用し、写真や動画など視覚的な教材も多数活用したいと思う。

工業高校では「総合的な学習の時間」が工業科の専門科目の「課題研究」で実施されており、工業各科と連携することで、生徒の課題製作に海外研修の経験を生かした国際理解教育の視点をプラスする指導が実践できると考える。

そして、これらの実践は「キャリア教育」にもつながり、特に進路において技術系の進学・就職予定者が多い本校では、生徒に将来技術者としてグローバルな仕事に取り組む可能性に気付かせることが大切だと思う。カンボジアで活躍するたくさんの日本人に出会い、国際社会で働く意味を問うことで、生徒が自分の進路を考えるための大きな指標を得たと思う。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

昨年度は1名だった JICA の同行者が、今年度は JICA 職員男女2名とファシリテーター1名に同行していただき、大変心強かった。安全面や、健康管理について、細かい配慮があり、安心して研修を続けることができた。最後に航空機の座席が足りないという緊急事態が起こり、結果として3名がプノンペンに残留となってしまったが、緊急対応に複数の担当者は絶対に必要だと思った。

また、開発教育のファシリテーターの参加により、毎日振り返りの時間を参加者で共有することができた点は大変良かったと思う。残念なのは、現地での研修中に関連書籍がたくさん紹介されたが、事前研修で知ることができれば準備をして研修に臨めたと思うので、来年度の研修計画での検討をお願いしたい。

現地にファシリテーターがいながら、自分は目の前に次々現れる素材を記録するのがやっとなので、効果的な素材収集など具体的な相談があまりできず、その意味でファシリテーター同行のメリットを十分に活かしきれなかったという反省が残った。

6. その他、研修全般を通じての感想・意見など

事前準備から研修中を通して、JICA 横浜と JICA カンボジアのスタッフによる綿密な連携のおかげで、充実した研修を実現することができたと思う。それぞれの立場で、研修参加者の意向や安全を尊重したプログラムが作成され、また、臨機応変に変更を加えながら、バランスの取れた10日間の研修を過ごすことができた。仕事に対する姿勢についても、それぞれのスタッフが、決して妥協せずより良いものを追求し続ける姿に深い感銘を受けた。

7. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

来年度は3年連続したカンボジア王国から派遣国が変わると思われるので、その環境にあった準備を心がけることが大切だと思う。

そのために重要なのは、現地スタッフからの情報であり、アドバイスはそれぞれ意味のあるものであったので、できるだけ詳細な現地情報を受け取れるシステムが有効だと思う。今回も、事前に立ち上げていただいたメーリングリストが大変役立った。

8. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
7月26日(火)	日本からカンボジアまでの移動中および現地到着	前日の事前研修及び YCAT 近くのホテルに前泊したことで、研修メンバーと一緒に出発することができて、安心感があった。

		プノンペン予想以上に都会化が進んでいたことが、研修最初の驚きだった。
7月27日(水)	JICAカンボジア事務所表敬	JICAカンボジア小林次長の説明では、カンボジアの現在の統計的資料が有意義だった。地雷より交通事故の死亡事故が多いと聞いて驚いた。
7月27日(水)	市内見学(現地マーケット視察)	プノンペン市内はバイク、自動車の交通量が多く、路線バスや電車は通っていない。 ラッキーマーケットは、日本の高級スーパーマーケットに雰囲気似ていた。隣の本屋で高校3年の社会の教科書を購入した。
7月27日(水)	JICA無償資金援助で建設された施設	JICAの無償援助の一つである下水処理の設備や日本の援助で建設された日本橋を船上から見学した。 船上で、船に生活している子どもにインタビューできたのが良かった。
7月27日(水)	本日の振り返り	実際にカンボジアに到着し、各自がカンボジアとこの研修について、様々な思いを持つことが確認され、これを共有できたことが良かった。
7月28日(木)	カンボジア日本人材開発センター	CJCCの大学生との交流では、グループに別れて時間をかけたインタビューが実現できた。 浴衣や書道実演のパフォーマンスも大成功で、中心となった小学校の教員のパワーに敬服した。
7月28日(木)	本日の振り返り	午後セントラルマーケットを視察したが、中高生くらいの若者が店番をしていたのが印象に残った。
7月29日(金)	国際保健協力市民の会(SHARE)	SHAREという日本のNGOがスバイアント郡の小さな村にまで入り、学校教育でカバーできていない保健教育・保育教育を実践し、子どもの健康を守るコミュニティ作りに取り組んでいることに感銘を受けた。
7月29日(金)	本日の振り返り	伝統文化スバエク・トーイ見学のため、振り返りの会は中止。各自で資料整理を行う。
7月30日(土)	アンコールワット	世界遺産であるアンコールワットには、欧米人と思われる見学者が多く、プノンペンやシェムリアップ市内の様子とは違った印象を受けた。だが、予想していたより観光客相手の物売りの姿も少なく、理由を尋ねると依然多く設置されていた土産物などの売店も国の指導で整理され、撤退したようである。
7月30日(土)	クメール伝統織物研究所(IKTT)	IKTTについては、事前に代表の森本氏の著書を読んで、周囲の環境を想像していた。森の奥深くであったことは予想通りだったが、そこに生活する人々は、自給自足に近い生活ながらも、充実した生活ぶりが印象的だった。夜10時には電気の送電も終わるということで、暗闇で一夜を過ごしたのも良い体験となった。
7月30日(土)	本日の振り返り	30日には時間がとれず、31日午前に振り返りの会を行

		った。
7月31日(日)	クメール伝統織物研究所 (IKTT)	移動までの時間を、各自が、森や家の見学、子どもたちへのインタビュー、織物の見学と興味のあることを選んで過ごした。最後に、IKTTのメンバーにも集合して頂き、記念写真を撮影することができた。
7月31日(日)	アンコールワット	アンコールトムのタプロム寺院を見学。遺跡に樹木がからみつく様子は歴史の長さを感じさせる風景だった。
7月31日(日)	本日の振り返り	SHAREの活動・アンコールワット・IKTTの実践について、参加者それぞれが注目したことを共有する機会となった。
8月1日(月)	カンボジア地雷対策センター博物館	カンボジア地雷対策センター (CMAC) 博物館では、カンボジアの地雷と不発弾撤去に関する今までの取り組みについて、詳しい説明を聞くことができた。地域による配置状況や撤去の進行状況がよくわかった。
8月1日(月)	海外ボランティア視察 (伊藤 SV, 徳富 JV)	シェムリアップ州教育青年スポーツ局を訪問し、伊藤明子シニア海外ボランティアから、教育行政・幼児教育の現状の説明を受ける。ここでも、日本人がボランティアとして、現地の教育の発展に深くかかわる様子がよくわかり、感銘をうけた。
8月1日(月)	母親教室 (就学前教育)	ソトニコム郡クチャ村において、シェムリアップ州教育局職員の同行の下、就学前教育である母親教室で、実際に子どもたちが歯みがき指導を受ける様子を視察した。予定にはなかったが、母親教室の場を運営する地元の小学校の校長先生の好意により、小学校の見学も行うことができて、有意義だった。
8月1日(月)	夜間の識字教室	夕食後、トンレサップ湖畔の水上生活者の集落に向かい、夜間の識字教室を視察した。参加者の多くは子どもだったが、暗い建物の中、電球一つの灯りの下で、学習に対する意欲の高さがうかがえた。テキストはユニセフが提供したものを使用していた。
8月1日(月)	本日の振り返り	翌日のワット・ポー小学校での視察と交流について、最終確認を行う。素材・教材の共有方法や、データのまとめ方についても確認を行い、帰国後の流れも見えてきたので、実践授業のイメージがつかめてきた。
8月2日(火)	ワット・ポー小学校	ワット・ポー小学校の子どもたちによる素晴らしい音楽演奏の歓迎に始まり、指導に当たる北海道滝川市草の根ボランティアの田中千草さんの活動に強い感銘を受けた。その後の交流では、折り紙を担当し、直接子どもたちと触れ合えたのが大変良い経験になった。生徒から預かってきた小学生に対する質問にも回答を頂けたのが大きな収穫だった。
8月2日(火)	コン・ボーン氏の講演	JICA カンボジア事務所に戻り、カンボジア難民として

		日本に在住し、帰国後カンボジア日本友好学園を設立し、教育に携わっているコン・ポーン氏の講演を聞いた。内戦体験者にしか語れない内容を聞き、歴史の継続の重要性を強く感じた。
8月2日(火)	本日の振り返り	ワット・ポー小学校の子どもたちやコン・ポーン氏と出会ったことで伝えられる教育実践を目指したい。子どもたちが皆カンボジアを好きだと答えていることが印象に残った。
8月3日(水)	現地マーケット視察 (ロシアンマーケット)	最後の市民生活の現地視察で、他のマーケットとは違う賑わいを体験することができた。同じプノンペン市内でも、複数の商業施設を視察することで、それぞれの商業施設によって訪れる市民も置いてある商品も違って、個性豊かな雰囲気を感じ取ることができた。
8月3日(水)	トゥールスレン虐殺博物館	館長の説明を受けて、内戦時代の虐殺の歴史を知ることができた。博物館の展示方法について、沖縄県の平和祈念館が支援をしており、何度も研修が行われていることも分かった。実際の現場がほぼ発見当時のまま保存されていることや、虐殺からまだ30年しか経過していないことから、虐殺がまだ過去のものとなっていない現実にも考えさせられた。
8月3日(水)	JICAカンボジア事務所 研修報告会	3度目のJICAカンボジア事務所訪問で、JICAカンボジア事務所の鈴木所長や文科省からカンボジア教育省に派遣されている大野専門家同席のもとで、研修報告会が行われた。 参加者の研修を体験した総合的な感想や鈴木所長や大野専門家のそれぞれの立場での実践が、大変参考になり、今後の授業実践のヒントをたくさん頂けた報告会となった。
8月3日(水)	本日の振り返り	8月20日に予定される帰国後の研修会に関する確認と国際理解とは何かについて考える手がかりをたくさん頂くことができた。
8月4日(木)	カンボジアから日本までの 移動中および日本到着	プノンペンから経由地のホーチミンに向かう航空機の座席が3席足りず、結果として研修同行者のうち3人がプノンペンに1泊するという予定外の事態が起こってしまったが、研修メンバーのチームワークの良さとJICA担当職員の的確な対応により、最終的に全員が無事帰国できて良かったと感じている。